

西行^{いおり} 「水の音はさびしき庵の友なれや 峰の嵐の絶え間絶え間に」

西行は平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての僧侶・歌人。本名・佐藤義清（さとう のりきよ）として裕福な武士の家系に生まれ、18歳で皇室の警護兵である兵衛尉（ひょうえのじょう）となる。そこで御所の北側を警護する「北面の武士」に抜擢された。一般の武士と違って官位があり、同僚には同い年の平清盛がいた。

御所では歌会が頻繁に開かれ、彼の歌は高く評価された。『新古今和歌集』には最多の94首が収録されている。また疾走する馬上から弓的を射る流鏑馬（やぶさめ）や鞍を落とさずに蹴りつづける蹴鞠（けまり）の名手でもあった。文武両道の俊英にして容姿端麗な彼の存在は広く注目されていた。

しかし華やかな将来を約束されていた彼は23歳の若さで突然出家する。その直接のきっかけとし

ては友人の急死や鳥羽院の妃への失恋などの諸説があり、真相は明らかではない。出家後は円位、のちに阿弥陀仏の極楽浄土が西方にあることから西行と名乗った。

長く孤独な漂白の旅へ

西行の出家は驚きと共に世間から賛意をもって受け止められた。当時の世相として出家それ自体は珍しくないものの、彼が若かったこと、官位を捨てたこと、裕福な暮らしを捨てたこと、大寺院に出家しなかったことなどが仏道への志の高さを示すものとして評価された。

とりわけその出家の仕方は通常のパターンとまったく異なっていた。彼は特定の宗派に属さず出家直後に京都郊外の小倉山や鞍馬山に隠棲した。それから心のままに各所の山里で庵を結び、生涯にわたって孤独な漂白の旅をつづけた。妻子と別れ、この世の地位も栄華も名声も求めない彼の生きかたは当時としてもきわめて異色の存在だったといっていだろう。

とはいえ彼は俗世を解脱した達観のひとではなかった。自己の迷いや弱さやさびしさをずっと抱きつづけた。彼のそんな揺れる心情は自作の和歌に率直に表現されている。石川啄木がみずからの作品を『悲しき玩具』と名づけたように、西行にとっての和歌も真の悟りに至るための自己格闘



の軌跡だったのかもしれない。

西行に関する逸話や文献が多いのはこの情感あふれる人間性に本質的に起因していると思われる。説話集の『撰集抄』や『西行物語』はもとより上田秋成の『雨月物語』、能の『江口』、『西行桜』、落語の『西行』、『西行鼓ヶ滝』、長唄の『時雨西行』など幅広いジャンルにまたがり、西行の大衆的な人気を物語っている。近年では白洲正子の『西行』、瀬戸内寂聴の『白道』、辻邦生の『西行花伝』など小説家にとっても西行はきわめて興味深い人物であるようだ。

花鳥風月を友として

西行の多くの歌には水を題材にしたものが少なくない。

水の音は さびしき庵の友なれや
峰の嵐の 絶え間絶え間に

峰々から吹きつけてくる激しい風のなかで
ときどき聴こえてくる河の流れの音色は
さびしくわびしい住まいの友なのだ

このほかにも――

松風の 音のみなにか石ばしる
水にも秋は ありけるものを

とくとくと 落つる岩間の苔清水
汲みほすほども なき住居かな



道の辺に 清水流るる柳かけ
しばしとてこそ 立ちとまりつれ

――などの歌がある。

西行にとって自然は花鳥風月のように愛でるものか、あるいは自己の孤独な心情を託す観照的なものだった。そこにはたとえば中国の老子のように自然と一体化するというような発想はない。

彼は仏道のために山里の庵で暮らし、終わらない漂白の旅をつづけながらも、あくまでも煩惱に苦しむひとり人間として生きた。その紆余曲折に充ちた人間らしさが多くの人々の共感を呼ぶのだろう。

願わくは 花の下にて春死なむ
その如月の望月のころ

願わくば如月の望月（2月15日）に
桜の花の下で逝きたい

如月の望月は釈迦の命日。この遺言ともいえる歌に象徴されるように彼は花鳥風月を終生の友として73歳でこの世を去った。（高倉）

参考文献

- 『新訂・山家集』岩波文庫
- 『西行物語』講談社学術文庫
- 『西行』岩波新書
- 『西行巡礼』新潮文庫